

## 【実践報告】

# 教育実習Ⅲ（幼）の報告

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 教授 善 本 桂 子

## 1 はじめに

幼稚園教諭一種免許状の取得を希望する学生を対象とした「教育実習Ⅲ」（4年前期開講）は、学生の出身園など希望する幼稚園、認定こども園において実習を行い、幼稚園教諭として必要な実践的知識・技能を身につけることを目標にした科目である。

各自が目標を掲げて実習を行うことで、集団及び個別の子ども理解を深め、幼児教育の理論をもとに、子どもの要求に応じた保育展開を実践する力を養うことを目的とする。

## 2 実施のスケジュール

項目	時期	主な内容
内諾手続	3年 8月～12月	(7月に内諾説明会を実施) ・希望する園へ直接電話をして実習先を決定する ・内諾訪問を行い、実習期間とおよその実習内容を決定する
事前学修 (学内) 全体学修2回 個別指導 3～4コマ	4年前期 4/16 5/21	・これまでの実習の振り返り（教育実習Ⅱ、保育実習ⅠⅡ） ・実習日程と内諾の確認 ・実習費等事務手続きの説明 ・実習先への事前訪問、実習内容の確認 ・実習前・中・後の諸注意と心構え ・巡回指導教員の確認と教員への挨拶（事前訪問、実習内容の報告） ・実習準備の個別支援（目標と課題、指導案） ・事後学修について（実行委員選出）
実習 (10日間)	6/1～6/12	実習の内容は、各幼稚園の計画による。主な内容は、①観察・参加実習、②日誌作成、③保育指導案作成と設定保育、④全日保育など責任実習、⑤日常業務である。
事後学修 グループ討議 2回 全体報告会	6/26、7/3 7/24	・実習の振り返りと報告書作成 ・事例を挙げてのグループ討議（2回） ・全体報告会に向けて資料作成 ・全体報告会の実施 ・自己評価票の作成と評価開示面談

## 3 実施の概要

平成27年度の「教育実習Ⅲ」は、履修学生48名で実施した。学生は、3年次に母園を含む近隣の幼稚園、学校法人認定こども園で各自内諾を行っている。最終的に実習園が決定するまで約半年かかったが、広島市15園23名、尾道市5園5名、福山市3園3名、島根県太田市2園2名、山口県柳井市1園2名、愛媛県

松山市2園2名、のほか府中町、東広島市、三次市、呉市、大竹市、島根県松江市、出雲市、浜田市、安来市、山口県周南市、愛媛県新居浜市各1園1名、計48名の学生が39の幼稚園、認定子ども園で実習を行った。

(1) 事前学修 1回目4/16(木)4コマ、2回目5/21(木)4コマの2回行った。実習の目標と課題、指導案は、学生同士で見合った後、担当教員2名が別コマを確保して個別の支援を行い、事前訪問までに完成させた。

(2) 実習 6/1(月)～6/12(金)の2週間(10日間)各幼稚園、認定子ども園にて実習を行った。今年度は、体調を崩しての遅刻、早退、欠勤などがなく、滞りなく実習を終えた。

(3) 巡回指導 幼教教員5名で電話(島根・愛媛など他県)及び直接訪問(広島県内すべての園、及び山口県東部地区、就職を考えての実習である場合)を行い、学生の様子を把握した。また、平成27年度より電話訪問の実習園へ手土産を送付することにした。結果、複数回の電話訪問時の対応に変化があり、学生の様子をより詳しく聞く事ができた。

(3) 事後学修 実行委員が作成した報告書(目標と課題から各自が決めたテーマ、実習期間、配属クラス、行事、テーマに沿った実態・事例・考察、設定保育、手あそび・絵本・ピアノ・うた、今後の課題)に各自が記入して提出し、テーマごとのグループで2回のグループ討議を行った。その討議からグループごとに事例を選び、考察を加えて、全体報告会に臨んだ。また学生は、自己評価票に記入して、評価開示面談を行った。

## 4 成果と課題

(1) 全体報告会について 5～6人ずつのグループで事例を出して討議を重ね、発表資料を作成して全体報告会に臨んだ。テーマは、以下の通りである。

①連続性を持った保育、②集団生活が始まったばかりの子どもへの援助、③子ども同士で注意し合える関係づくり、④子どもの興味を広げる保育～自然体験を通して～、⑤子どもが遊び込むとは何か、⑥3歳児における子ども同士の関係づくり～少人数保育の事例より～、⑦食事場面における子どもへの援助、⑧子どもが泣いたときの援助、である。全体報告会では、学生の討議から得られたものが資料となり、参加者に配付された。子どもの様子をよく観察し、記録している。子どもの状況や場面を具体的に捉えて、その背景にも目や心を配ることができつつあることがわかる発表であった。しかし、当日警報が出て休講になったことで、日程が変更になり、下級生の参加がなかったことが、何より残念であった。

(2) 自己評価について 「幼児を知る」「保育者を知る」「保育実践を知る」という3つの観点を細分化した20の項目について、かなり良好=A、やや良好=B、やや不足=C、かなり不足=Dという評価基準で、学生は自己評価を行い、その理由を記述している。学生の実習内容についての自己評価は、Aがほとんどなく、およそB・Cであった。またその理由も、努力して臨んだが、できなかったというものがほとんどであった。子どもの思わぬ反応に戸惑い、臨機応変の対応ができなかったという様子であった。しかし、反省会などで保育者から適切なアドバイスをいただき、今後に向けた新たな課題を見つけたと言う記述もあり、最後の項目「教職への意欲」については、B及びAの記述がほとんどであった。特に22名の学生がA評価をしており、充実感や達成感を味わったことがわかった。また、実習先の幼稚園へ就職したいという希望を記述した学生もいた。

すでに数多くの実習を経験した4年生にもかかわらず、自己評価B・Cを多い傾向があることは気になる。中には、力量は十分なのに、自己評価の低い学生がいる。このような学生には短期的な対処療法だけでは十分な効果はない。4年間の学科・コース教育を見直し、例えば不測の事態に対応できるようなレジリエンスや的確な予想・準備の力、即興的思考などを計画的に育成していく必要がある。後期の教職実践演習でさらに学びを深めることを期待する。